

『現代語訳・黄帝内経素問 [上巻] 』  
(第1版訂正箇所)

頁	行	誤	正
x	10	元から明朝	元から明清
4	下段7	大僕王冰	太僕王冰
10	11	大僕	太僕
19	左から2~3	「玉服論要」	「玉版論要」
25	左から6	累法方宜論	異法方宜論
32	5	括憺虚無	恬憺虚無
41	左から2	括	恬
78	左から2	「腸満」と	「脹満」と
84	上段3・ 下段3	痺	痺
85	9	痺	痺
88	16	隔	膈
94	左から2	本説	本節
95	表 水に属する 五味	酸	鹹
	表 火に属する 九竅	耳	耳 <sup>④</sup>
	表 水に属する 九竅	二陰	二陰 <sup>⑤</sup>
	表下	③腰股あるいは四肢。	③腰股あるいは四肢。④または舌。⑤ または耳。但し、このようにした場合 「九竅」にはならなくなる。
	表下	もとづいて作成。	もとづいて取舍し、作成。
99	10	胸隔	胸膈
	16	〈陰陽〉	『陰陽』
101	下段3	精は気に食 <sup>⑦</sup> (読み：く) らい、形は味 に食らい、	精は気に食 <sup>⑦</sup> (読み：やし) なわれ、形 は味に食なわれ、
102	9	⑦食らう	⑦食なわる
118	左から8	鬱	鬱
154	左から3~4	べきであるとしている。	べきであるとしている [のでこれに従 い訳す] 。
156	2・8・ 10~14	鬱	鬱
	6	④喉痺	④喉痺
158	5	足の少陰心経	足の少陰腎経
161	上段3	相伝之官	相傳之官
	下段3	相伝の官	相傳 (読み：そうふ) の官
164	下段1	変化は <sup>①</sup>	変化は
	下段2	消 <sup>②</sup> する者はは	消 <sup>②</sup> する者は
182	上段3	音色能彰	音声能彰
	下段4	音色をして	音声をして
197	下段9	三百五十四名、	三百五十四名有りて、

199	下段1	癩 (読み: てん)	巔 (読み: てん)
201	下段1	滑、瀦 (読み: しょく)	滑・瀦 (読み: しょく)
202	下段2	微診	微診
	上段11	痺	痺
220	上段5	愈者	愈者
226	上段2・ 下段2	痺	痺
227	左から12	②五痺	②五痺
239	8・9	鬱	鬱
240	6	鬱積	鬱積
247	下段2～3	孤 <sup>④</sup> を逆となし、虚を従となす。	孤 <sup>④</sup> は逆となし、虚は従となす。
	左から6	③虚泄なるは	③虚泄するは
251	5	甚 <sup>⑨</sup> しき	甚 <sup>⑨</sup> だしき
252	10	間なるは	間なる者は
	12	一周したのを俟って	一周したのを伺って
254	13	天人相感	天人相応
255	上段9	惕惕	惕惕
	下段10	惕 <sup>③</sup> ● (巾+易) (読み: てきてき)	惕 <sup>③</sup> 惕 (読み: てきてき)
256	7	③惕● (巾+易)	③惕惕
259	下段1～2	必ず布 <sup>②</sup> ● (巾+敷) (読み: きょう) を	必ず布● (巾+敷) <sup>②</sup> (読み: きょう) を
	左から1	隔膜	膈膜
263	8	煩燥	煩躁
266	上段3	盛。	盛衰。
269	8	煩燥	煩躁
271	下段8	分かち	別かち
297	下段5	中る者は	中 (読み: あた) る者は
	下段7～8	胸仆 (読み: けんぼく) と <sup>⑤</sup> なす	胸 <sup>⑤</sup> 仆 (読み: けんぼく) となす
	上段11	過者、切之	過者切之、
	下段14	ある者の、これを切して	ある者はこれを切し、
298	上段1～4	内而不外、～按之至骨、	297頁上段15～18行目に移動
	左から4	静あるは	静ある者は
302	上段3	脈五動。	脈五動、
310	下段11	盛んにして	盛にして
	下段16	盛んなる	盛なる
311	左から2	あたって、寸口脈の過不足を知りたい と思う場合は以下のようにします。	あたっては、寸口脈の過不足を知る必 要があります。
314	下段9～10	堅き者	堅なる者
317	上段 左から2～3	曰腎腎脈来、如引葛、按之益堅、	削除
320	15	数の肌象を	数の脈象を
323	下段3	長なり。	長たり。
332	18	その形象	その形跡
333	1	まことに微妙で奥深く、とらえどころ がない。	微妙で奥深く、ほとんどとらえどころ がない。
338	下段2	次を以てを得ざらしむ。	次を以て得ざらしむ。

	左から2	深く侵入し、人の意志を喪失させることを	深く侵入すると、人の意志を喪失させてしまうことを
342	左から1	積すべきだろう	積することができる
349	下段3～4	脈盛んにして	脈盛にして
353	下段2	願わくば	願わくは
	下段6	星 <sup>⑤</sup> 辰歴紀に応じ、下は四時五行に副う。貴 <sup>⑥</sup> 賤	星 <sup>⑤</sup> 辰の歴紀するに応じ、下は四時五行の貴 <sup>⑥</sup> 賤
354	下段1～2	夏は陽 人を以てこれに応ずることい かん。	夏は陽なるに副（読み：かな）う。人 を以てこれに応ずることをい かんせん。
355	下段2	これをなすことい かん。	これをなすことをい かんせん。
356	下段10	三部なる者に、	三部なる者は、
359	下段1	候うことい かん。	候うことをい かんせん。
360	下段1	決することい かん	決することをい かんせん
365	5	『甲乙計』	『甲乙経』
368	下段1	治すべき者はい かん。	治すべき者をい かんせん。
371	下段1	勇怯（読み：ゆうきょう）・脈も	勇怯（読み：ゆうきょう） 脈も
373	下段5	四時陰陽、	四時・陰陽、
374	4	四時、陰陽	四時・陰陽
375	9～10	精気は筋を滋養 します	精気は筋に滋養を 与えます
	12～13	精気は循環して、 四蔵をあまねく行 り流れております。	精気が循環し、四 蔵をあまねく行 り流れ、
376	下段1～2	陰不足陽有余 なり。	陰不足 陽有余 なり。
381	下段1	四 <sup>①</sup> 時五行に	四 <sup>①</sup> 時・五行に
382	2・9	四時五行	四時・五行
391	9	辰、戌、丑、未	辰・戌・丑・未
393	下段4	厥陰と少陽 なり。	厥陰と少陽と なり。
394	下段1	満し、	満ち、
399	下段1～2	四時五蔵、	四時・五蔵、
400	3	四時五蔵	四時・五蔵
402	下段2	嚏（読み：さい）	嚏（読み：てい）
415	14	熨 <sup>②</sup> 引（読み：うつ いん）	熨 <sup>②</sup> （読み：うつ）・引（読み：いん）
420	下段3	これをなすこと い かん。	これをなすことを い かんせん。
	下段4	器津を	器の津を
421	下段3～4	これをなすこと い かん。	これをなすことを い かんせん。
431	下段2	行き易し。	行（読み：めぐ）り 易し。
	下段11	天の序、盛虚の 時に因りて、	天の序 盛虚の 時に因りて、
438	下段7～8	而して行くと 曰う。	而して行くと 曰う。
440	下段1	陰陽四時、	陰陽・四時、
441	左から13	陰陽四時とし、 虚実に	陰陽・四時・虚 実に
447	17	静に気を候い ながら	静かに気を候い ながら
463	下段11	手足の温き なり。	手足の温かき なり。
467	2	滞下	帯下